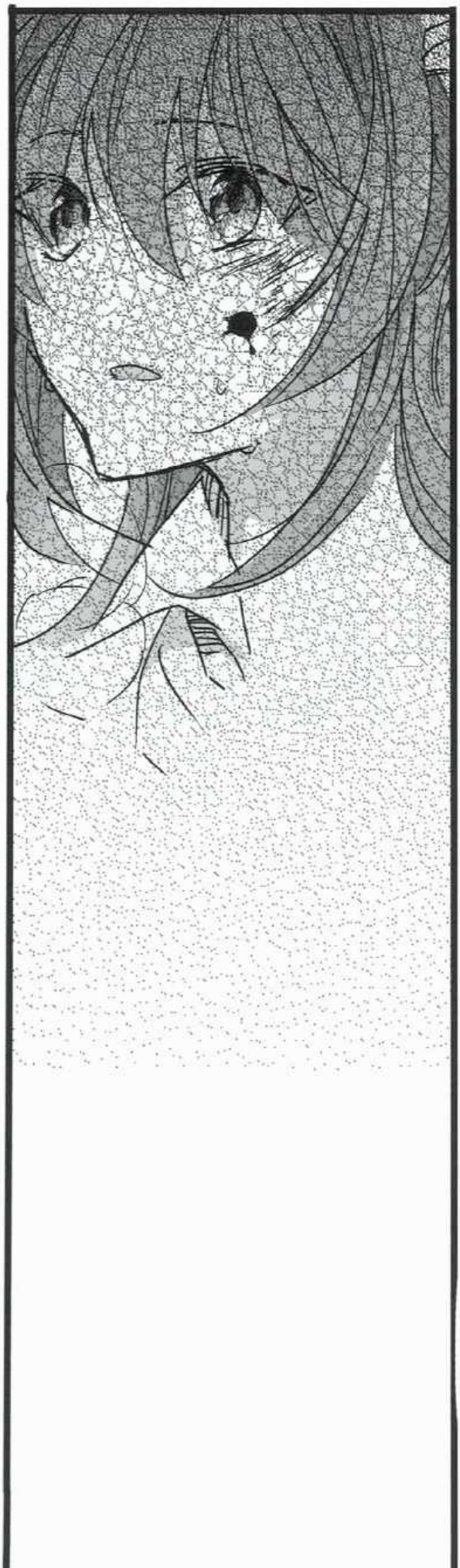
喰らわば恋しき毒となれ

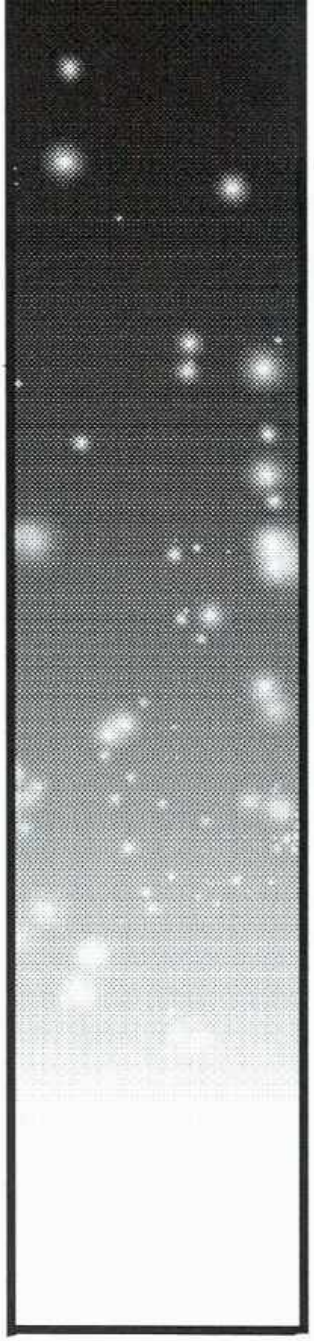
R18
Adult Only

※諸注意※
カルデア巌窟王が監獄塔イベントの記憶を引き継いでいます。
ネタバレ・捏造・偏見・がっつり恋愛描写含みます。

壷の中では火は燃えぬ

ご機嫌よう
マスター！
今日のクエストも
無事に帰ってきて
くれて嬉しいわ
ご機嫌よう
ナーサリーの元気な
顔が見れて嬉しいよ
ん。
君が童話以外を
読むのは珍しいね
ふふふ
主人公がアナタと
少し似ているの！





君は誰？

あなたも
恋をしているのね？

ううん
ちっとも
おかしくないわ
恋をしてる人は
その目を見れば
わかってしまうの
ほら！
こんなにも心を染め上げて
燃え盛っているのだから

気づいたら
こんな時間…
工房は時間間隔が
麻痺しちゃうな
コツ
コツ
でもこういう
時でないとじっくり
スキル調整できないし
トラブルも起こらず
ダ・ヴィンチにも最後まで
付き合ってもらえて良かった

ああ
おかえり

た
ただいま？

どうしたマスター
ご意向通り寝室での
煙草は控えているぞ

いや、
喫煙自体は
いいんだけど

何でわざわざ
わたしの部屋の
わたしのベッドに
陣取るかな…

容易く男に寝床を許しておきながら
まぁ拒んだ試しもないがな…
人目がつかぬ場所の方が何かと都合がいいだろう
ギリシャ語？
お前のそれは都合のいい時ばかり切れ味が鈍るな
……
人目？
俺を殺したときは

あんなにも鋭く

美しかったというのに

英霊を尊敬し
愛でたがるこれは

喚びだした途端
すっかり欲を
見せなくなった

アヴェンジャー？
つまらなそうな顔してる
そうだお前が悪い
恋しいサーヴァントの相手をしてくれないかマスター

求められるのは
慣れないか
いけないこと
みたいに思って
しまうから…
いけないこと?
それは俺の存在
そのものだろうよ

この手で彼を殺した
時の感覚が消えない

たとえば髪を解く
情事の合図だったり

何気ない瞬間に
あの七日間が蘇る

あれが最善の手
だったと解っていても
離れず焼き付いたまま

君はちゃんと
ここにいるのに…

て
手袋
汚れるよ
ぐ
ぱちん
いっ
なら
外してくれ

ン…む
ッ

や
破くのは…

そう思うなら
次からは靴くらい
脱いで寝台に
上がるべきだな

なんて理不尽な
エロ中年だ！

さいあく…

おや
知らなかったのか？

いや…
わたしが

君のこと好きで
大切だけど

こういう…
何度やっても
君を
汚してるようで

『恋なんていらないのね』

いけないって

そうだとも
仇敵でも庇護対象でもない
愛でなくて恋だ

はっ
幕を引く筈だった舞台で
ま…っ
ふ～ア
言っておくが
堪えるより
拒んだ方が楽だぞ
お前の為に
身を燃やしたかった

俺を汚してくれるんだろう？
毒炎と汚しあってくれるんだろう？
はっ
はっ
…あ

ここにいた
…はは
ほんとだ
きみの
ほのお
ほしかった

この…俺そのものを疾つくのとうにくれてやっただろうが…

お前という女は本当に…はぁ…

あっ

抜い…

ぞくっ

ぞくぞくっ

ぎしっ

ひっ

ん

あ

あ

『俺』は他に何をお前にしてやれるんだろうな？

ふミはっ
そんな莫迦げことで
頭が埋まっているなんて
知らないんだろう？
んっ
あ
ああっ
あっ

今はもうそれだけでは満たされない。

コン コン
Bonsoir マスターに会いに来たのだけど
残念 眠り姫は呪いにかかった後かしら?
ああ、悪いが今夜は解けそうにないな
俺で良ければ部屋まで送ろうか
いいえ ご遠慮するわ
火傷って怖いもの

http://pixiv.me/ig2　http://amezou-ig.tumblr.com/

洞穴

雨象

掘っても、掘っても、出口の見えぬ、果てしのない空洞。俺はこの空洞が好きだ。彼女のほらあなは温かい。ファリア神父がその昔掘った穴も、同じように温かったのだろうか。もう、憶えていない。牢獄の冷たさも、憎しみに燃えたあの日々も、憶えていない。

「忘れた？」

少女が首を傾げる。

何を、とは問わなかった。

「忘れた」

俺は答える。

少女の顎下まで垂れた赤毛を指先で遊んでいる内に、首筋の薄い皮に爪が引っ掛かってしまった。捲れた皮の内から滲みはじめた美しい鮮血を見下ろして、その血を使い描くように少女の肉の上をなぞる。首元を赤く汚した少女は、また、首を傾げた。

「エドモン・ダンデス」

薄い色の唇がふ、ふ、とかたちを変えながら一文字一文字を紡いでゆく。より濃い赤が、開かれた唇の内側でちろちろとのぞくのが眩しくて、それを塞ぐようにして口付けると、少女は丸めた拳でどん、と胸の上を叩いてきた。

「…マスター」

ぴったりと貼り付いた互いの唇をゆっくりはがして、少しだけ生まれた空間で唇を動かして少女を呼べば、小さな顔の全面がみるみる紅潮していくさまを愉しむことができた。

「このような愉しい暮らしばかりしていては、かつてを忘却へと放ってしまうのも無理はないだろう」

かつての、牢獄での暮らし。その幾年の間のこと。

「えっ、愉しい暮らしって…スケベなことばっかりしてるだけじゃ…」

その言葉に対して俺がわざとらしく、ニタリ、と唇を緩めて笑んでみせると、少女は動揺したように目を見開いた。それからしばら

くの間は気まずそうに視線を彷徨わせていたが、それが『逆効果』であることに気付いたのか、少女はすぐに俺好みの強い眼差しをぶつけてきてくれた。
「今だって、スケベなこと考えてるって顔、してるし…」
「どうだか。…しかし、好きなのだろう?俺の、この顔が」
「うん」
少女は眉を下げて微笑み、こく、と小さく頷いた。尚も紅色を増した頬に、指を埋めると見た目通り熱かった。
「お前も充分そういう顔をしているぞ」
その言葉を少女は否定しなかった。
眉を顰めて少しだけ怒ったような顔をしたものの、ろくに抵抗せずに、やわらかな二の腕の上を這う掌を避けることもなく、白い腹の上を擽る爪先を疎ましそうにすることもなく、折れそうに華奢な肩を震わせながら、細めた瞳から放つ強い眼差しを止めることは決してなかった。
「…アヴェンジャー」
…お前のような強い女は好きだ。
例え俺が再び牢獄に捕われようとも、そんなことにも構わず、己を見失わずひとり生きていける逞しさを持った、そうして俺が牢獄から出てきた暁には「誰」と顔を顰めることさえできるほどに薄情で、自由で、勝手な女が好きだ。
「あなたは、私のこともいつか忘れるのかな。…いいな、そういうの」
「……」
「はやく忘れて」
見たもの、感じたこと、ぜんぶ。そうでなければ恥ずかしくて死んでしまう――
少女は普段の逞しさを欠片も感じさせないようなしおらしい声と表情を見せておいて、それをすぐ隠すように、顔を両手で覆って幼子のように丸まった。
お前のような、肝心な所で頭の弱い女は嫌いじゃない。
少女の薄い膜を食い破った瞬間の悦びを、どう忘れることができよう。そうして薄い膜から滲んだ血と体液とをぐちゃぐちゃに掻き混ぜて、少女のあたたかなほらあなをいっぱいにした。童心にかえったように、自由気ままに突き上げた。どうして忘れることができよう。彼女のほらあなの中で、俺は一等自由になれる。
「お前は、自由を忘れろと言うのか」
「…なに?」
「お前という自由を」

掘っても、掘っても、出口の見えぬ、果てしのない空洞。俺はこの空洞が好きだ。彼女のほらあなは温かい。

芳しい匂いに目が眩む。真っ暗になって、何も見えなくなる。

しかし少女の赤が、暗闇を照らす。

目もとの赤、唇の赤、首筋の赤、乳頭の赤、粘膜の赤。

その明りを欲してすべてを喰らえば、少女はか細い声を上げて震えた。きもちがよすぎて、気を失いそうになる。まるで牢獄から脱出して陽の光を浴びたあの瞬間にも似ていた。

俺は今日も、少女の洞穴の中で、童心にかえる。

*

――忘れて

彼はエスパーだろうか。

心の中で忘れて、忘れてと乞うたびに、エドモンは酷くつまらなそうな顔をする。それを表に出しているつもりはないのに。声に出したのもただの一度きりだ。けれどもつまらなそうだ。エドモンは、すごくすごくつまらなそうな顔で、今日も私を見下ろす。

「や、っだ…その顔、」

乱れた前髪をぐしゃりと潰すように、自身の額の上に腕を置くことで顔を隠そうとするが、それもすぐに強引に引き剥がされてしまう。それから『嫌』と訴えたのに逆のことをされた。意地悪だ。ずいっと近付いてきたのは、ほうらまた、つまらなそうな彼の顔。乾いた唇から、ふっ、と吐かれた息からは苦い匂いがした。煙草のにおい。銘柄とか、そういうのはあまり詳しくないのでよくわからないけれど、出来ればもっと軽いものを吸って欲しいと思う。わたしとこういうことがしたいのなら。

『したい』…そもそも、そんな欲などあるのだろうか。彼に。

でも、なんだかんだ言いつつも結局、私は女だから。どうしても願ってしまう。どちらかといえば『したい』って思われたい。

なのに、忘れてほしい。

例えばもし、少しでも『したい』って思ってくれたのなら、その想いさえもいつか…ううん、なるべくはやめに忘れてください。

「…忘れた？」

「何を」

「なにをって。いつもは聞かなくても、答えてくれる癖に」

そう、『忘れた』って、いつものようにそう答えて欲しい。

困り顔の私を冷めた色の目で見下ろして、エドモンはまた愉しげに口端を上げて笑った。

「はは。逞しい女のそういう顔は…たまらなくそそられるな。俺に、

お前のような女の趣味はなかったのだが…」
「そういう顔って」
「そういう顔は、そういう顔、だ。今、お前がしているような」
言葉の直後、指の腹がぐぐ、と太股の肉に食い込んでくる圧迫感に顔を顰めている内に、開かれた太股の間、ぷっくりとした秘唇に、表面がすべすべした熱い塊を押し付けられる。花びらを押し広げるように擦りつけられた先端の丸いソレは、本人の意向で決して避妊具を纏わないのでくっきりと性器の色をしている。秘唇の膨らみをぐち、と潰されて、内側に隠れていた蒸れた赤い核を直に掻かれた。瞬間、訪れるのはこの上ない快楽で、ただただ私はどうにもならない身体を抑え込むようにして両腕に抱いた。
「ひっ…、…や、わす、わすれて…っ！」
いま見た色も、感触も、はやく忘れて欲しい。
生理的に潤んだ瞳を懸命に抉じ開けて、目の前にある『つまらなそうな顔』を映し込んで、眉を顰めて泣きそうな顔をすれば、冷たい声でこう言い放たれた。
「俺から自由を奪うなよ」
陰核から膣口までの短い距離を何度も何度も亀頭に繰り返し擦られ、直接的でない感覚にじれったい気持ちになりながら、目の前の整った顔をじろりと睨んでみせると、エドモンはようやく笑ってくれた。
「俺の自由、俺の…マスター」
言葉のあと、つるりと滑り込むように膣口に丸い肉の頭が押し付けられる。入口は期待に滑っていて、そんな、女体の構造をいつも呪いたくなる。彼の腕に抱かれる時は、いつもだ。
「マスターは、サーヴァントの子を孕むか」
そんなの私が聞きたい、とそう思った。そしてそう思った直後、押し付けられた亀頭が、粘膜を捲るようにしてくち…、と音を立てながら侵入を果たす。内側を掻かれる悦さに意識が吹っ飛びそうになるのを堪えたくて唇を噛んでいたら、あろうことかその口先を生温かい生き物になぞられた。ふ、と目を開くと先程よりも近くにエドモンの黄金の瞳があった。ふう、ふう、と口元に吹きかけられる空気は生温かく微かにヤニの匂いがしたことで、いま唇の上を這っているものの正体が彼の舌であることが分かった。銀の前髪が垂れてきて額を撫でるのがくすぐったくて、微かに肩を揺らした瞬間、ゆっくりと進んでいた腹の中のエドモンがずくっと大きさを増して、突然素早く突き上げられた。
「ひっ…っ！？あっ、ま、まっ、て…っ」
「孕んでしまったら…お前の自由を奪うことになるな。責任はとる。まあ俺は、サーヴァントだがな」

彼の金の瞳に浮かべられたのは切なげな色だった。そんな悲しそうな顔をされても、泣きたいのはこっちだ、と私は思った。

うねった粘膜の道を、エドモンは器用に何度も何度も擦り上げてきた。どこから湧き出てくるのがじわじわと滲む体液がエドモンの熱に絡み、ぬちぬちとおかしな音を立てる。硬く強張った先端で乱暴に急所を突かれるたびにぶわっと肌が粟立ち、緩んだ唇から漏れ出した喘ぎ声をエドモンに食べられた。全部、食べられる。私がマスターだからだろうか。塞がれた唇を割って入ってくる生温かい舌先はやっぱりヤニくさくて、でもその匂いがどうしても胸を熱くさせてくる。けれど認めたくなかった。タバコの匂いが好きだなんて。

「ふっ、う、ひゅ、ふ、は…っ」

中途半端に漏れ出した空気の音、くぐもった音、唾液、やっぱり全部食べられた。疾うに私は自由を奪われていた。けれども悪い気はしなかった。

「自由だ…っはは、ははっ！自由だ…お前が、俺の…っ」

高笑いしながら腰をがくがくと揺らす目の前の男は傍から見れば気狂いにも見えるかもしれない。私にも、そう見える。そう見えるのに、たまらなく愛おしい気持ちがこみあげて「よかったね」と言いたくなってしまうのは何故だろう。これが母性というやつなのだろうか。

「忘れてなどやるものか…馬鹿め」

突然、笑うのをやめたエドモンは、吐き捨てるようにそう言うなり、少しだけ悲しそうに顔を顰めて、また、息までをも喰らうような口付けを与えてきた。それから、私の腹の上に圧し掛かるようにしながらきつく腰を打ち付けてくる。振動で同じように揺さ振られながら、乱れた髪を彼の指にぎゅ、と握られる。その雄々しさにどくどくと心臓が波打って、身体の芯がさらに熱くなった。

「…っ、ま、まって…、も、もうっ」

首を大きく振る事で強引に外した唇でそう訴えると、エドモンは身体の動きを緩めるどころか一層激しく揺すってきた。弱い所を激しく貫かれる快楽に目を剥いて口をぱくぱくさせていたら、彼は荒い息を吐きながら腹の奥でまた性器を大きく膨らませた。

「く、るっ…、あ、ああっ」

「…っだすぞ…孕めよ、マスター」

それは困る。

と訴えるより先に絶頂を迎えた肉厚の膣がびくびくと痙攣しながら収縮し、彼の性器と共に吐き出された精液をぎゅううっと締め付けた。蛙のように跳ねた私の身体を押さえつけるように胸に抱きながら、エドモンは心地良さそうに息をひとつ、吐いた。

「…孕めよ」

＊

そうして少女と身体を重ねるたびに、思い知らされることがある。エドモンが、少女を女として見ているのだということ。しかしただ性処理をしあうためだけの関係でも、サーヴァントとマスターなどという契約に縛られた関係上のものでもない。

ただ、ひとりの女であって欲しかったのだ。エドモンと共に寄り添うことを望み、エドモンの子供を孕むことを望み、共に死すことを望んで欲しかった。

『欲しかった』と過去形なのは、なんだかんだいいつつも、諦めがついてしまっているからだと思う。

「忘れてよ」

頬を膨らました少女を胸に抱きながら、エドモンは静かに笑んだ。

「なにを」

「孕めって言ったこととか、なんか、全部」

「それは忘れて、ではなく、忘れたい、ではないのか」

「…ちょっと違う。忘れたくは、ないもん」

とにかく恥ずかしいの。

そう言って少女は顔を隠すようにしてエドモンの胸板に頭を押し付けてきた。密着した皮膚に感じたのは高い体温で、残念ながら、少女が恥ずかしがっていることが顔を見なくても分かってしまった。

「恥ずかしいどころか、心地良い。お前の…」

お前の果てしないほらあなは。

「私は、忘れられないから、忘れろっていってんの」

「そうか」

「そうかじゃない」

「……」

「黙るのも無し。まあいいや、ちゃんと、いつか忘れてね。私はそんなあなたが好き」

同じように、忘れられない俺は嫌いか。…などと、問う必要もない。問う理由もない。何故ならエドモンは疾うに諦めているから。諦めながらも、口で孕め孕めと言い続けているのだから、なんと不毛なのだろうと自分でも思う。ひどい矛盾だ。

しかしエドモンは知っている。孕め、というたびに少女が満更でもなさそうな顔をするのを、知っているから、口にする。それだけでもう充分な気さえするのだ。

では詰まるところ
『オレ』を手に掛けたことを
引き摺っていたからといって

『俺』を骨抜きにした女を
責めるような狭量な男に
見られていたわけか？

骨…

鈍いのは思い知った
から言っておくが
過信や妄言ではないぞ

お前は知らないだろうが
あの時のお前は
それだけの価値があった

…それでも

好きな人を
殺すなんて

嫌だ

お手に取っていただきありがとうございました！

SpecialThanks# 雨象様 pixiv【id=17301101】
素晴らしい巌窟王とマスターの関係をありがとうございます！

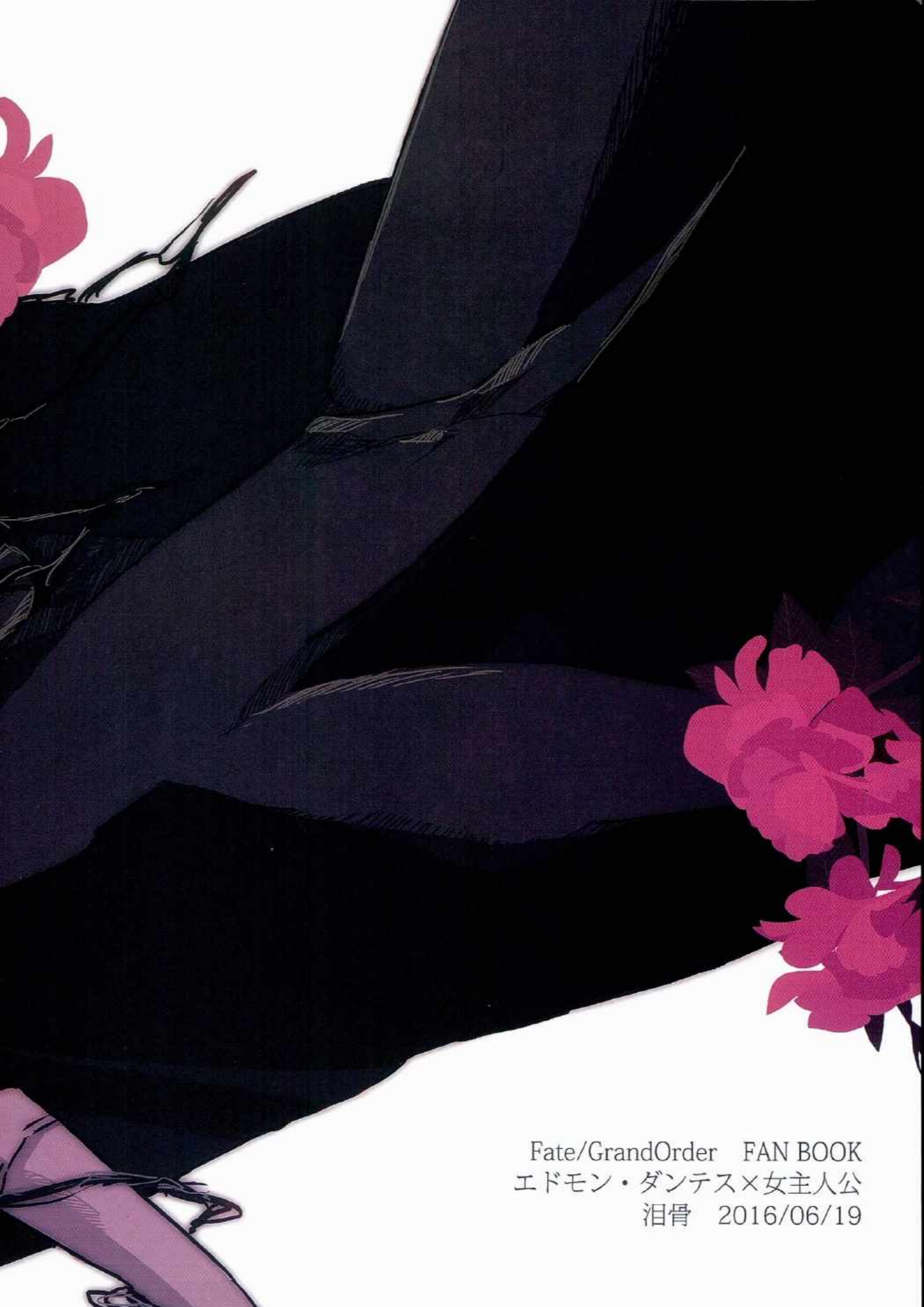
「喰らわば恋しき毒となれ」

発行日　2016/06/19

発行　泪骨
pixiv　314780
連絡先　therickxxx@gmail.com

印刷　栄光印刷

※公式・各企業とは一切関係ありません。
※無断転載・無断転写禁止



Fate/GrandOrder　FAN BOOK
エドモン・ダンテス×女主人公
泪骨　2016/06/19